天香さん生誕147年を祝う「春の集い」

所功氏講演「御代がわりと日本人」

一燈園

創始者・西田天香師の誕生祝いにちなむ一燈園「春の集い」が陽春の4月20日、京都市山科区四ノ宮にある一燈園で開かれた。

西田多戈止当番は次のように挨拶し、所功氏による講演の意義を述べた。

「昭和64年1月7日の昭和天皇の崩御を私は8日朝、年頭行願に行く宮崎空港で聞いた。そして即位された新天皇が昨日は最後の行幸をされた。4月10日、国立劇場で開催された即位30年を祝う『感謝の集い』で天皇陛下は、『象徴としての天皇像を模索する道は果てしなく遠く、これから先、私を継いでいく人たちが、象徴のあるべき姿を求め、この時代の象徴像を補い続けてくれることを願っています』と語られた。私は即位2年後に起きた雲仙普賢岳の噴火被災者を見舞われた陛下が、床にひざをついて話しかけられたのが印象的で、その姿を見た国民の多くが、象徴としての天皇のあり方を了解したように思う。陛下は国民統合の象徴の道を懸命に歩まれたが、国民はどれほどのことをしてきたか、その道とは何か、所先生の話を通して考えたい」

講演する所功京都産業大学名誉教授＝4月20日、京都山科区の一燈園

登壇した所功京都産業大学名誉教授は「御代がわりと日本人のあり方」と題し、次のように講演した。

私は昭和16年に岐阜県揖斐町に生まれ、23年に小学校に入った。当時の忘れられない思い出の一つが、わが家に来た知らない人が手洗いと家の掃除をしてくれたこと。私の父はソロモン諸島で戦死していて、母が苦労して育ててくれた。母は私に、人の嫌がることを喜んでする人もいるのだから、覚えておくといい、と言っていた。そんな生き方のあることを、小学生の時に知ったのはとてもよかった。

今上陛下の在位30年で、国民の天皇に対する評価はとてもよくなった。感謝を込めて、御代がわりの行事を見守りたい。

4月1日、新しい元号「令和」が発表された。

西田多戈止当番

私は学生時代から元号の研究をしていて、元号廃止論が多かった30年前にもNHKで元号の解説をした。今回は、陛下が元気なうちに皇太子に譲位されるので、前回とは違う雰囲気で元号の選定が行われ、私もテレビで解説した。

元号は漢字で書かれる。漢字はとても便利で、脳梗塞で倒れ、会話ができない元研究者の妻に、ひらがな、カタカナは通じないが漢字だと意味が通じる。脳は複雑なものほどよく分かるらしい。漢字を発明した中国人に感謝したい。

元号は2200年前、中国・前漢の武帝が自らの治世をさかのぼり、建元（紀元前140―同135年）と定めたのが始まり。日本での始まりは645年からの大化で、1300年続いている。その間、中国をはじめ朝鮮、ベトナムでは使われなくなった。元号は国のアイデンティティー、独立の証でもあり、日本独自の文化で、それに対して西暦は文明と言えよう。人は文化と文明の2本足で立つので安定している。

令和は日本最古の歌集『万葉集』から取られた。今は命令の令ではなく、令嬢などに使われる、よい、美しいという意味。和は平和で、英語では「ビューティフル・ハーモニー」と訳された。これを新しい時代の希望として大事にしていきたい。

両陛下はこの30年間、国民に寄り添いながら、象徴とは何かを訊ね求めてこられた。考えるだけでは分からないことで、各地で人々に出会い、語り合い、理解し合うことがある。最初から泣き叫ぶ赤ちゃんがいたり、きょとんとした表情の赤ちゃんがいたりさまざま。なかなか泣きだざない赤ちゃんに対しては、行司が大きな声でびっくりさせ何とか泣かせようと四苦八苦。その様子がまた観客の笑いを誘う。両方の赤ちゃんが泣き出したところで行司が「この勝負、行司預かりにて万歳楽」と告げる。参加した約120名の赤ちゃんの健康と成長を祈願した。

取り組みを終えた赤ちゃんは、同神社の境内にある大鵬関により奉納された出世の前で、今度は学生力士に抱かれて「赤ちゃん力足（四股奉納）」を行う。四股踏みは、まだ定着していない赤ちゃんの魂をその体にしっかりと定着させるための所作と伝えられており、健康に丈夫に育つよう祈願するものだ。四股を踏んだ後、力士が赤ちゃんを高々と上げ「日本一」と声高に叫ぶと観客から拍手が起こった。

1歳の息子と参加した人は「この子は未熟児で産まれたので健康が心配。テレビで行事を知って参加した。本物のお相撲さんに抱っこしてもらい、元気に泣いて、大鵬関の出世石の前で四股も踏んだので、元気に育つと思う」とうれしそうに話した。同神社の北川正訓禰宜は「子の健康を願う親の思いはいつの時代も同じ。赤ちゃんの元気な泣き声が神様に届くようにと泣き相撲を奉納している」と語った。

雪ヶ谷八幡神社の創建は永禄年中（1558～69）とされる。北条左京大夫氏康の臣太田新六郎管内巡視の際、同所において、法華経曼荼羅の古碑を発掘し、その奇瑞により八幡大菩薩を創祀すると伝えられている。慶長、元和の頃、円長寺、長慶寺の創建により別途、二寺臨年に奉仕するところとなる。

旧中原街道沿道髄一の由緒ある神社として人々に崇敬され、文久3年に社殿を再建し、明治3年に拝殿を造営、次いで明治23年に再び本殿を起工し、明治28年に落成、遷宮を行った。昭和20年5月の戦災で社殿を焼失し、昭和34年8月に現社殿を造営した。

境内には異例の出世をとげ、「心」「技」「体」の三位一体を兼ね備え、不世出の大横綱と称えられた大鵬関が奉納した出世石があり、大鵬関の直筆と手形も刻まれている。

雪ヶ谷八幡神社で一心泣き相撲

元気に泣いて赤ちゃんを卒業

東京都大田区

昭和の日の4月29日、東京都大田区の雪ヶ谷八幡神社（北川正保宮司）で一心泣き相撲（代表：別所啓介・湯泉神社宮司）が行われた。これは、乳児から幼児へと赤ちゃんの成長を祝い、力強く泣くことで健やかに育つことを祈願する行事で、赤子の泣き声が邪を祓った故事を由来に400年以上の歴史がある。

社殿で祈願した後、泣き相撲に挑む。取り組みは1対1で行われる。両親が思い思いにわが子に付けた四股名を行司が呼ぶ。四股名が入った兜と紅白腰縄の廻しを締めた赤ちゃんが、尾上部屋の力士に抱かれて土俵に上がる。最初から泣き叫ぶ赤ちゃんがいたり、きょとんとした表情の赤ちゃんがいたりさまざま。なかなか泣きだざない赤ちゃんに対しては、行司が大きな声でびっくりさせ何とか泣かせようと四苦八苦。その様子がまた観客の笑いを誘う。両方の赤ちゃんが泣き出したところで行司が「この勝負、行司預かりにて万歳楽」と告げる。参加した約120名の赤ちゃんの健康と成長を祈願した。

赤ちゃんの成長祈る一心泣き相撲＝4月29日、東京都大田区の雪ヶ谷八幡神社

取り組みを終えた赤ちゃんは、同神社の境内にある大鵬関により奉納された出世石の前で、今度は学生力士に抱かれて「赤ちゃん力足（四股奉納）」を行う。四股踏みは、まだ定着していない赤ちゃんの魂をその体にしっかりと定着させるための所作と伝えられており、健康に丈夫に育つよう祈願するものだ。四股を踏んだ後、力士が赤ちゃんを高々と上げ「日本一」と声高に叫ぶと観客から拍手が起こった。

1歳の息子と参加した人は「この子は未熟児で産まれたので健康が心配。テレビで行事を知って参加した。本物のお相撲さんに抱っこしてもらい、元気に泣いて、大鵬関の出世石の前で四股も踏んだので、元気に育つと思う」とうれしそうに話した。同神社の北川正訓禰宜は「子の健康を願う親の思いはいつの時代も同じ。赤ちゃんの元気な泣き声が神様に届くようにと泣き相撲を奉納している」と語った。

雪ヶ谷八幡神社の創建は永禄年中（1558～69）とされる。北条左京大夫氏康の臣太田新六郎管内巡視の際、同所において、法華経曼荼羅の古碑を発掘し、その奇瑞により八幡大菩薩を創祀すると伝えられている。慶長、元和の頃、円長寺、長慶寺の創建により別途、二寺臨年に奉仕するところとなる。

旧中原街道沿道髄一の由緒ある神社として人々に崇敬され、文久3年に社殿を再建し、明治3年に拝殿を造営、次いで明治23年に再び本殿を起工し、明治28年に落成、遷宮を行った。昭和20年5月の戦災で社殿を焼失し、昭和34年8月に現社殿を造営した。

境内には異例の出世をとげ、「心」「技」「体」の三位一体を兼ね備え、不世出の大横綱と称えられた大鵬関が奉納した出世石があり、大鵬関の直筆と手形も刻まれている。

下のお気持ちに国民として沿いながら、美しく平和な令和の時代を築いていきたい。

午後の部は、一燈園高等学校生徒による尺八演奏と先生による日本舞踊の披露があり、昨年暮れに宮崎放送TVが放映した「未来に生きる＝サンメッセ日南誕生物語」のDVDが上映された。

天台宗延命寺で花祭り

インド・オリッサの舞踏を奉納

さいたま市浦和区

4月14日、さいたま市浦和区の天台宗延命寺（河野亮仙住職）で、釈迦の生誕を祝う演奏と舞踏の第22回花祭りが開催された。延命寺は、天長6年（829）の創建とされ、入口には樹齢約400年の市指定天然記念物ムクノキがそびえる。

午後1時半に本堂の扉が開き、22回目の花祭りが始まった。花祭りは古くは降誕会（ごうたんえ）と言われていたが、明治以来、花祭りとして皆に親しまれている。

河野雅亮副住職が導師を務める平和祈願法要では、最初に河野亮仙住職が「インドでは神様の名前、シヴァ、ヴィシュヌを人の名前としてつける。仏陀はヴィシュヌ神の化身だと言われている。今日はインドからヴィシュヌさんをお迎えして、踊りの中でヴィシュヌ神の化身、仏陀を表現する。私たちにとってはここにお釈迦様を迎えるということだ」と挨拶し、仏教青年会の若手僧侶からなる8人の式衆が入堂した。

河野住職と青年僧侶の釈尊の徳を讃える天台声明が本堂内に響き渡り、参加者の心を浄土へと誘う。サックス（金剛督）とガムランの演奏（櫻田素子、渡辺泰子）が法要に花を添えた。導師により世界平和と人々の幸福を願う表白が読まれ、式衆と共に般若心経の読経が行われた。バリ舞踏の舞姫（荒内琴江、小泉ちずこ）が釈尊の降臨を讃える天女として法要を彩った。

続いて、ヴィシュヌ・タットヴァ・ダース師、田中晴子さん、サキーナ彩子さんの3人によるオリッシー・ダンスが披露され、最後は「座ベストテン」と題し、春にちなんだ昭和歌謡の曲、「春よ、来い」「赤いスイートピー」「愛燦燦」「マイ・スイート・ロード」などを金剛督さん（サックス）、林あけみさん（キーボード）が演奏し、会場の参列者が曲に合わせて口ずさんでいた。

延命寺の花祭りは演奏までがすべて法要というコンセプト。本堂の内陣と客席、僧侶と出演者が一体となり、仏様の御前で共に祝うひとときになっている。

インド仏教は、時を経てヒンドゥー教に吸収され、イスラーム教徒が侵入したことにより13世紀ごろには滅亡したが、ヒンドゥー教の中に足跡を起こし、仏陀はヴィシュヌ神の9番目の化身、アヴァターラとされている。ヒンドゥー教では、創造の神であるブラーフマー神、世界を維持する神であるヴィシュヌ神、破壊と再生の神であるシヴァ神が中心とされている。

観音菩薩が様々な姿でこの世に現れて、困難な時に救ってくれるようにヴィシュヌ神も変身し、危機に際して救済をする。獅子の面をした人である人獅子、斧をもった戦士であるパラシュラーマ、インドで人気があり、仏陀の兄弟分にあたるラーマ、クリシュナ、未来に現れて救ってくださるカルキンなど。

伝説の戦士ラーマは弓が得意で、美貌の神クリシュナは笛が上手、そして仏陀は瞑想の姿を表す。このような様々な神格は踊りの中ではムドラーと呼ばれる手の印と身振りで表現されている。また、ヴィシュヌ神の神妃で富と幸運の女神のラクシュミーは仏教では吉祥天となり、ヴィシュヌ神の娘カーマは恋愛、和合を司る神である。

インド・オリッサの舞踏、右からヴィシュヌ・タットヴァ・ダース師、サキーナ彩子、田中晴子＝4月14日、さいたま市浦和区の延命寺

岡山宗教散歩〔6〕

法然⑥

叡山を下り、法難に遭遇

郷土史研究家　山田良三

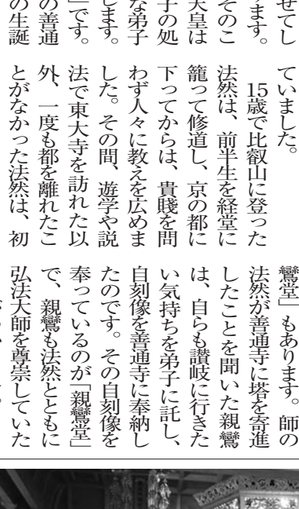
黒谷の青龍寺で師叡空と論争した法然は、その後叡山を下りて、広谷を住まいとしたと諸伝は伝えています。しかし梅原猛氏は、百万遍知恩寺に伝わる伝承から、法然は最初、鴨川の河原に草庵を作り住んだと推察しています。後の伝記の著者たちが「広谷」に居住したと書いたのは美化ではないか、というのです。

法然の弟子源智がこの賀茂の河原に、後に知恩寺を建てます。知恩寺はその後各地を転々としますが、境内に加茂明神鎮守堂があり、賀茂氏あるいは秦氏との関りがあることからも、法然がこの地に草庵を結んだのだろう、と梅原氏は推察しています。

叡山を下りた法然は、やがてその学識で広く人々に知られるようになり、武家や公家にも法然に救いを求める人々が続出しました。

その名声を一層高めたのが、有名な「大原問答」です。博学な僧侶たちが大原に集まり論争を続けましたが、法然の学識に勝るものは誰もいませんでした。この時、大原にやってきた一人が重源で、弟子十数人を連れていました。法然の学識に屈服した重源は、法然の重要な理解者となります。遊行僧であった重源は法然に相通じる世界を感じたのでしょう。平家は、それを辞し重源を推薦しました。東大寺の再建がほぼ完成したころ、重源は法然を招いて浄土三部経の講義を聞く会を開いています。

武家出身で法然の弟子となった代表が熊谷直実で、直実は自ら法然のもとに押し掛けるようにして出家し、法力坊蓮上と名乗りました。法然の願いを受け、師の自刻像を背負って誕生地を訪れ、師の生家を寺にしたのが誕生寺です。


善通寺に残る「法然上人逆修塔」

法然の庇護者の代表が九条兼実でしょう。九条兼実は法然から何度も灌頂を受け、法然が戒師となりの戒師で出家もしています。法然の唯一ともいえる著書『選択本願念仏集』も九条兼実の要望に応えて書いたものです。のちの法難で四国に流されたときには、九条兼実の働きで流刑地が土佐から讃岐に変更されています。法然の弟子になったのは源氏や平家の武士や公家たちで、いずれも騒乱の犠牲となった人々でした。

法然の名声は高まるばかりで、それに反発する叡山や南都の僧たちは、「念仏停止」を求める動きを強めます。そんなとき、法然の弟子たちが、当時の最高権威者である後鳥羽天皇が熊野詣をしている間に、天皇寵愛の女御たちを出家させてしまう事件が起こります。熊野詣から帰り、そのことを知った後鳥羽天皇は激怒し、2人の弟子の処刑と法然ほか主要な弟子たちの流罪を決定します。これが建永の法難」です。

香川県善通寺市の善通寺は弘法大師空海の生誕地として知られていますが、